

19世紀イギリス音楽界における子ども演奏家の実態

—1800年代音楽雑誌にみる神童—

竹山貴子*

Reality of child performers in 19th century British music industry

—Prodigies in the music magazines of the 1800's

TAKEYAMA Takako

abstract

In this thesis I search for the realities of the reception of prodigies who are small musicians in Britain in the 19th century. The earlier works concerning the prodigies target only at the specific period in Germany. But the case of Britain where the public concert starts has not yet researched in detail. Britain, especially London was a city that prospered as a music city as well as Paris and Vienna, and where the commercialization of music came promptly through the development of capitalism and journalism.

Therefore, it is useful for clarifying of the childhood in Britain to examine the realities of the prodigies there. I considered them, analyzing the descriptions concerning prodigies in the music magazine articles on the 19th century.

In Britain, the articles that praise the prodigies were the majority, and after it had entered the 20th century, the articles that criticized the prodigies were written for the first time. Moreover, in Britain the performing technique was highly evaluated, and I clarify that this evaluation related directly to the fact that the music room which thought mainly performance technique became popular at that time.

Key words : prodigy, Britain, music education, childhood, 19th century

1 はじめに

著者は、「音楽文化史」という観点から、西欧での大人による子どもへのまなざしの変遷と、音楽に内在する教育的意義の誕生とその歴史的变化の究明を研究の目的としている。そのために、「奏でる子ども」と「聴取する子ども」という二つの視点を設け、考察を試みてきた。本稿は「奏でる子ども」からの論考である。

17世紀のイギリスで公開演奏会が誕生、普及し始めた頃から19世紀末までは、聴衆の対象とされていたのは集中的聴取¹のできる成人のみであった。子どもは聴衆としてコンサート・ホールへ足を運ぶことが許されない存在として区別されるようになり、公開演奏会の成立とともに音楽文化においても、主に中産階級では子どもと大人という意識の分化が始まったと考えられる²。しかし、18世紀から19世紀のヨーロッパでは、モーツァルトに代表されるような、いわゆる「神童」(prodigy, Wunderkinder)と呼ばれる子どもたちが、大人の聴衆を相

キーワード：神童、イギリス、音楽教育、子ども観、19世紀

*平成20年度生 人間発達科学専攻

手にステージ上で卓越した演奏を繰り広げており、この時期は「神童」が次々と登場し、熱狂とともに大人たちに受け入れられていった。「神童」という、子どもでありながら大人以上の能力を発揮する不思議な存在に人々は魅了されていたことから、普通の子どもの異なる子ども観を彼／彼女らに投影していたと考えられる。そこで著者はこれまで、音楽とジェンダー研究者のフライア・ホフマン (Freia Hoffmann)³の神童論に着目しながら、ドイツでの神童受容とその子ども観について論じてきた⁴。しかし、彼女の研究では、公開演奏会発祥の地であるイギリスについてはほとんど触れられていないことや、音楽商業都市の先駆として無視できないロンドンを扱っていないことなどから、課題を残している。よって本稿はその課題を受けて、イギリスの神童受容の実態について論じる。

2. 先行研究における神童の定義

神童という言葉は現在でも珍しいものではないが、辞書や事典で詳しく扱われているものは少ない。ファス⁵ (Paula S.Fass) の子ども学辞典では、「prodigy (神童・天才児) は、創造力や、数量的能力、空間認知、または言語的な能力といった、人間が取り組む特定の領域で見られる非凡な能力によって、しばしば特徴づけられる。」⁶と定義づけられている。具体例としてイエス・キリストをはじめ、ジャンヌ・ダルグ⁷ (Jeanne d'Arc) やモーツァルト⁸ (Wolfgang Amadeus Mozart) といった、もはや伝説・歴史上の人物か、もしくはメニューイン⁹ (Yehudi Menuhin) やピカソ¹⁰ (Pablo Ruiz y Picasso) など20世紀の天才を挙げており、フライア・ホフマンが述べていたような18、19世紀における多数の神童の活躍についてはほとんど言及されていない。

また教育学や保育学では、早期教育や英才教育と関連付けられて、詰め込み教育の最たるものとして批判や論争の対象となっており、古くはワーズワース (William Wordsworth) やルソー (Jean -Jacques Rousseau) も神童批判を行っている¹¹。

このような神童をめぐる言説の中で、ホフマンは、ドイツにおける当時の社会との関係で神童を捉えている点で注目に値する¹²。彼女は18世紀から19世紀のドイツにおける熱狂的な神童の受容理由に「音楽の商業化、大衆化、コンサートの規模の拡大、旅回りの音楽家たちのあいだで競争が激しくなり、その結果、聴衆にたえず新たなセンセーションを提供しようという傾向が強くなった」¹³ことを挙げている。

ホフマンの唱える神童の特徴を一言で表すならば、近代における「前近代の遺物」である。なぜなら、家族機能や児童労働、教育制度や子ども観が近代化するなかで、神童たちは当時の矛盾した子ども観が具現化された存在であるからだ¹⁴。この神童に内在する矛盾点として、詳しくは拙稿で論じているが¹⁵、おおまかに以下の三つを挙げるができる。

- ① 近代において前近代の生活スタイルを維持していながらも、彼らの人々による受容の背景には近代的孩子観の登場があった
- ② 神の化身のような彼岸的なムードを漂わせたイメージを当てはめられると同時に、大人によって理想的に教育された存在である
- ③ 女性性をタブー視して子どもが無性のイメージに覆われていた社会風潮の中、少女の神童については性的な対象として公に鑑賞されていた

このことは同時に神童に対するまなざしの特殊性を示している。さらに、おもに中産階級以上の大人たちが成人のヴィルトゥオーゾ (技量の卓越した音楽家) ではなく、子どものそれを熱狂的に求めたということは、すでにこの時代では大人と子どもの差異が明確に意識されていたことの裏づけとなるだろう¹⁶。

3. 問題の所在

以上のように、ホフマンによると神童は非常に矛盾した面を併せ持った存在であり、独特な子ども観を帯びていた。しかし、ホフマンの考察対象は主に1750年から1850年までのドイツ語圏における市民文化に限定したも

のであるため、他の地域や時代への考察は不十分である。特にイギリスのロンドンには公開演奏会の発祥地であり、18世紀以降は音楽商業都市として栄えていた。コンサート活動や音楽ジャーナリズムも盛んであった¹⁷にもかかわらず、それに関してホフマンの研究ではほとんど触れられていない。イギリスではナポレオン戦争後の1820年代から景気が上向きになり、その後一時的な不景気を経るが、1851年には万国博覧会を開催し、成功を収めている。1850年代から60年代の景気回復期のなかで上層労働者の生活も豊かになり、娯楽を求めるようになった。それと関連して、公園、博物館、図書館、劇場などが発達し、1840年代に敷かれた鉄道も1860年までにはその距離を50倍の16000キロメートルにまで伸ばす。人々の活動範囲も広がり、娯楽の種類も増加した時期だった。ホフマンも、「モーツァルト姉妹や小さなヴァイオリニストのゲルトルート・エリーザベト・シュメーリングといった音楽の神童たちが最初に目指したのは公開演奏会が早くから発達していたイギリスであった¹⁸と述べていることから、イギリスでも神童の活躍は華々しく、メディアでも大きく取り上げられていたと推測できる。さらに19世紀になると出版コストも小さくなり、また安価な楽器も多く製造されるようになったため、大衆にも出版物や楽譜、楽器が流通するようになった¹⁹。よって音楽人口も膨れ上がることで、人々が音楽教育を受ける機会も増加したと考えられる。

したがって本稿では、イギリスでの神童受容がどのようなものであり、受容の仕方においても時代によって変化が生じていたのか、19世紀に刊行されていたイギリスの音楽雑誌記事分析を通して解明することを目的とする。

4. 資料

音楽雑誌記事検索RIPM²⁰で、「prodigy」「child」「wonder」といった神童を示す語句をもとに記事を検索し、該当したものからイギリスで刊行されていた雑誌に絞って分析した。RIPMの検索により、*The Harmonicon*、*The Musical Examiner*、*The Musical World*、*The Musical Standard*、*The Musical Times and Singing Class Circular*の5誌が該当した。

*The Harmonicon*は、1823年から1833年まで刊行されていた。当時は短命な雑誌が多いなか、刊行が長く続いていた雑誌である。中産階級が好んでいたロンドや変奏曲についての言及が多かったため、主に保守的な中産階級が読んでいたとされる²¹。*The Musical Examiner*は1842年から1844年までロンドンで刊行されていた。*The Musical World*は1836年から1891年まで刊行され、イギリス初の総合的な音楽月刊誌である。*The Musical Standard*は、1862年から1871年まで、*The Musical Times and Singing Class Circular*も、1844年から1902年までロンドンで刊行していた。1903年からは*The Musical Times*と名前を変え、2006年まで続く。

5. 神童の受容と評価

前述の雑誌記事をもとに、掲載された雑誌名、日付、神童の名前、演奏していた楽器、当時の年齢、演奏場所、演奏楽曲を文末の表Iにまとめた。

1870年代を除いては、どの年代でも神童に関する記事が掲載されている。ホフマンの研究で引用されていた雑誌記事は、そのほとんどが1841年から1849年というかなり狭い期間のものであったが、イギリスでは1800年代全般にわたっている。

1) 19世紀に活躍した神童

次ページの表Iを参照してほしい。最初に登場するジョージ・アスプル²² (George Aspull) (記事①と③)は、1813年マンチェスター生まれのピアニスト・作曲家で、主にイギリスとアイルランドで活躍するが、1832年に若くして結核で亡くなる。8歳までピアノに触れたことがなかったにもかかわらず、11歳までの3年間で音楽家ロッシーニに「ヨーロッパでもっとも非凡な人物だ」と言わしめるほどに才能を開花させた²³。彼の現役時代で該当した記事は2つであるが、死後数十年たってからは9度も取り上げられている²⁴。ちなみに、1824年の記事には現年齢が8歳と記載されているが、当時の年齢はすでに11歳に達していて、年齢を偽った可能性がある。神

表 I

雑誌名	年月	名前 (生没、国)	楽器	年齢	演奏場所	演奏楽曲
①The Harmonicon	1824/3	George Aspull (1813-1832、イギリス)	ピアノ	11(8)	英	カルクブレンナー編曲「神は王を救う (God save the King)」と即興曲、モシュレス「Grand Variations on the Fall of Paris」など
②The Harmonicon	1824/4	Franz Liszt (1811-1886、ハンガリー)	ピアノ	13	不明	不明
③The Harmonicon	1824/4	George Aspull	ピアノ	11	不明	カルクブレンナー、モシュレス、フンメル
④The Harmonicon	1824/6	Franz Liszt	ピアノ	13	独、仏 (パリ)	不明
⑤The Harmonicon	1826/5	Krogulsky	ピアノ	8	波蘭 (ワルシャワ)	カルクブレンナー
⑥The Harmonicon	1831/8	Giulio Regondi (1822-1872、フランス・リヨン)	ギター	8	不明	不明
⑦The Musical World	1838/12/20	Filippa	ヴァイオリン	3	仏 (パリ)	不明
⑧The Musical Examiner	1843/6/10	Charles Filtsch (1830-1845)	ピアノ	13	仏 (パリ)	タールベルク「ドン・ファン」、ショパン「エチュード」、リスト「ルチア」
⑨The Musical Examiner	1844/1/6	Miss Day、その兄	ヴァイオリン、ピアノ	不明	ベルギー (ブリュッセル)	不明
⑩The Musical Examiner	1844/7/20	Teresa(1827-1904) and Maria(1832-1848) Milanollo	ヴァイオリン	不明	不明	不明
⑪The Musical World	1846/9/6	Henriette Merli (イタリア)	ピアノ	6	伊	リスト、ヘルツ、タールベルク
⑫The Musical World	1851/9/27	Batemanの息子たち(アメリカ)	演劇	不明	米	不明
⑬The Musical Standard	1867/5/25	Master Charles、Le Jeune	オルガン	不明	英	バッハのプレリュードとフーガ、フンメル「グランド・デュオ」変イ長調、オラトリオ伴奏
⑭The Musical World	1883/5/19	Carl Lewy	ピアノ	不明	不明	不明
⑮The Musical Times and Singing Class Circular	1887/2/1	Pauline Ellice	ピアノ	11	英	メンデルスゾーン「カプリチオ」、リスト「リゴレット・パラフレーズ」など
⑯The Musical World	1901/4					

童の年齢詐称は日常的で、特に女兒の場合にはよく行われていた²⁵。

また神童は姉妹や兄弟で出演すると、より注目度が高まるとされる²⁶。表 I にある神童で、ドイツでも注目されていた人物は、レヴィ (Lewy) 兄弟と、ミラノロ (Milanollo) 姉妹である (記事⑩と⑭)。レヴィ兄弟の兄カール (Carl) はピアニストであるが、妹のメラニー (Melanie) はハーブ弾きの天才少女と言われ、弟のリヒャルド (Richard) はホルンを演奏した²⁷。記事⑭はカールの死亡記事である。そしてテレーザ (Teresa) とマリア (Maria) のミラノロ姉妹は、ドイツでは「ミラノロ熱」と言われるほどの熱狂旋風が吹き荒れた。妹のマリア

は結核により16歳で亡くなる。姉妹は、同じく神童として活躍していた同世代のチャールズ・フィルチ²⁸ (Charles Filtsch) とライバル関係にあった。

2) 演奏楽曲

楽曲についてはピアノ曲しか掲載されていなかったが、カルクブレンナー (Freidrich Wilhelm Kalkbrenner)、リスト (Franz Liszt)、ショパン (Frédéric François Chopin)、ヘルツ (Henri Herz)、タールベルク (Sigismund Thalberg) による作曲で、いずれも超絶技巧を要する作品ばかりである。1824年のリストを賞賛する記事 (記事②) には「彼の演奏は機械のような運動によって人間の演奏のように感じない。……それは見事な指と同じように精神の表れを表現した」とある。しかもそれはピアノ曲だけに当てはまるのではなく、ギタリストの神童レゴンディ (Giulio Regondi) の記事 (記事⑥) にも「難所を正確で器用に演奏する」とあるし、オルガニストの神童ら (記事⑬) の記事にも「……セバスチャン・バッハのペダル・フーガのような構成の、とても複雑な作品を暗譜で演奏するような……」とあり、難しいパッセージを楽器でいかに機械的で正確に速く弾くかということが、当時の演奏家には求められていた。そして、精神的な表現よりも先にテクニックに言及しているところから、表現よりもテクニックにより関心が寄せられていたとうかがえる。

ちなみに、カルクブレンナーとヘルツも、リストやショパンが登場するまで絶大な人気を博したヴィルトゥオーゾ的なピアニストであった。両氏は、速いパッセージやオクターヴを正確に弾くなど、複雑な指の動きの練習を行うために、カルクブレンナーは「ハンドガイド」、ヘルツは「ダクティリオン」という指矯正器具を発明し、生徒たちに使用させていた²⁹。当時、イギリスをはじめヨーロッパでは効率よく指を鍛えるために、このような指の矯正器具の発明と普及が盛況だった。ロギール (Johann Bernhard Logier) は、19世紀初頭に初めて器具を使っての練習法を編み出し、大儲けした人物である。彼の考案した器具キロプラスト (またはカイロプラスト) は1814年に特許を取り、イギリスでこの器具を使用したピアノ教室をはじめたところ、かなりの評判を呼び、イギリスでは50教室 (うちロンドンでは5つ) 経営することになる。つまり、これだけの数の教室で子どもたちが一斉にピアノの練習を行っていたということは、自分の子どもを神童にしようと目論んでいた親が多数いたと言えるだろう。1824年の記事 (記事①) には、アスプルは同年齢の少年たちと比べても身体がとても小さく、まだ指も短いためにオクターヴが届かなかったとの記載があるので、このような器具を使って指を広げる訓練を行っていた可能性がある。

3) 神童に対する当時の評価

記事の中で神童たちの報告がどのようになされていたのかを見ると、1800年代の記事はすべて賞賛する内容のものだった (記事①~⑮)。1901年の記事 (⑯) のみが神童を批判するものである。以下、詳細を追いたい。

①賞賛

まず「extraordinary」、「genius」、「eminent」といった言葉で神童の非凡さを表し、続いて「incredible」、「astonished」などで驚きを表している。続いて、2) でも触れたように、ほとんどの記事で技巧に関する絶賛がある。例えば、リストに対する「反復される輝かしいパッセージには目を見張る」や、アスプルの「過度に困難な作品のすべてを、少しのためらいもなく演奏された」などである。そして同時に音楽的な表現力に対して、1887年の記事 (⑮) のような、ピアニストのパウリーン・エリス (Pauline Ellice) を、「彼女は褒めるに足る洗練された表現豊かな演奏をし、彼女の演奏のすべてにおいて、技術的な要求と釣り合いが取れていた」と褒めたたえている。

ドイツにおいて、神童ブーム期に含まれる1840年代の雑誌記事でも、イギリスと同様に神童たちを賞賛していたが、同時に批判する内容も書かれていた。例えば、技術面ではすぐれているが、精神性が未熟であるとか、技術面よりも芸術面が遅れているとか、主に音楽的な表現についての未完成さを指摘するものであった³⁰。しかし、イギリスでは19世紀末まで神童を賞賛する内容の記事しか掲載されていなかった。ドイツでは神童の精神性の未熟さを批判していたが、イギリスでは神童をその精神性さえも成熟したものと捉えていたことがうかがえる。

また容姿やしぐさに関しても、人々の目を引くような美しさが特徴的である。例えば、*The Harmonicon* に掲

載されたレゴンディの描写は以下のとおりである。

「ほとんど子どもだといっても過言ではないギウリオが現われた途端に、彼の容貌に夢中になる。均衡のとれた、目を引く美しい子どもは、生き生きとした表情で、彼の首と肩にかかった長い亜麻色でカールした優雅な髪、そして彼の態度と行動は不自然ではなく天性の優雅さを持っていて、直ちに見物人の興味を喚起する。」
(1831年8月付)

神童は実際に演奏をする前から、すでに容姿で人々を魅了していたことがうかがえる。このように美しく清らかなイメージは、特に女兒の神童には効果的に用いられていた³¹。

②批判

批判に関する記事は、賞賛寄りの記事の紙面登場に比べると、かなり遅い。1901年のThe Musical Worldに掲載されたエッセイでは、親や教師の欲深さを批判しながら、8、9歳の小さな子どもに真の音楽的な表現は不可能であることが述べられている。また、過度の干渉のもとで機械的な練習を行うことは心身に悪影響を及ぼすとし、まだ子どものうちに亡くなったクリスチャン・ハイネケン (Christian Heineken) の例を挙げて、神童は可哀想な人間であると主張した。

「小さな子どもたちは、音楽の神童として両親や教師のうぬぼれや強欲を満たすために搾取されている。8、9歳のピアニストが年端の行かないのに驚くほどの技術的な熟達を見せることによるものか、またはオウムの生得能力と同類の天性の模倣能力によって注目を浴びる。8歳のピアニストに本物の感情表現を期待することは無意味である。感情表現なしの音楽に何があるのか？そして若いピアニストは単に物珍しいだけであって、それは両頭のナイチンゲール (サヨナキドリ) や、年端のいかない少年外科医、電光電算機のように興味を満たすための存在であった。神童はそれゆえある一定の時間内におびたしい数の音を演奏する。

大きな傷はこのように、おそらく生まれながらに健全な音楽的本能を持つ子どもたちに降りかかる。過度の干渉は機械的な上達を促す。それは、子どもの促成栽培や温室育成であり、思慮に欠けた称揚は虚栄心のある子どもを育てる。そして犠牲者の健全さが重労働を苦しいものだと感じさせない場合は、その精神は有害な影響に必ず晒されている。」(1901年4月付)

このような批判的な記事がイギリスでも出現した背景には、19世紀の初頭からみられる義務教育制度の整備へ向けて、親の子どもに対する教育の権利や責任を法的に明確化する動きや、児童労働に対する規制が本格的に行われることと関連していると考えられる。ホフマンによると、神童への教育で特徴的なのは、彼らを学校には通わせずに、父親が語学や教養などすべての教育を引き受けることである。しかし、1839年のトールフォード法 (Talfourd's Act) では父権に制限が設けられ、1840年児童監護法、1873年未成年者監護法 (Custody of Infants Act)、1886年未成年者後見法 (Guardianship of Infants Act) へと発展したことにより、時代が下るにつれて子どもの教育に対する母親の権利が増大してくる。子どもの主な教育者が父親から母親へと移行するのである。また、これらの法整備が整う前の1810年代から40年代にかけては育児書の発行数が激増した時期でもあり、人々の子育てに対する関心も高まっていたとすれば、これらの法的な動きを促す素地はあった。また、1884年には児童虐待防止協会 (The London Society for the Prevention of Cruelty to Children)³²が設立することによって、神童への虐待に近い日々の鍛錬が、非難や取り締まりの対象とされても何ら不思議なことではない。批判的な内容の記事が登場するのはドイツよりもずいぶん遅れたが³³、このような法整備とも関連して、記者をはじめとする大人たちの子ども観が変容してきたことを表している。

また岡田暁生によると、前述のロギールのキロプラストがヨーロッパ各地で技術偏重だと非難されたにもかかわらず、イギリスで大当たりしたのは偶然ではなかったとしており、ウィーンで刊行されていた1819年の『一般音楽新聞』では、イギリスにおけるロギール受容について皮肉めいた記事を次のように紹介している。

「機械の発明が得意なイギリスで、メカニックな頭をした人間が、ビール醸造や織物製造といった有益な技術において既になされたのと同じように、ピアノ演奏の芸術も簡便化しようとするのは、よく分かる。また、民衆の音楽教養が最低のレベルにあり、ジェントルマンの教育からも音楽が排除されているイギリスにおいて、こうした機械が発明されたことも、よく分かる」³⁴

世界でいち早く工業化が始まったイギリスにおいて、効率的に技巧面のみを鍛錬し上達させるロギールの音楽教室の流行と、ミニチュア・ヴィルトゥオーゾが手放して喜ばれ受け入れられた状況との間には、関係性がうかがえる。上記の引用のなかにイギリスの音楽教養の低さも述べられているが、当時のイギリスでの音楽教育はとも乏しく、音楽教育の発達していたドイツを参考にするため派遣員を送り調査させたがそれも失敗に終わり、低迷期が続いていた³⁵。ひいては、音楽教育面では遅れを見せるが産業面では先進的なイギリスと、音楽教育面は先進的であるが産業化では遅れているドイツとの対比も、神童の受容を通して見えてくるように考えられる。

6. おわりに

以上、19世紀当時最も音楽文化の栄えていた都市のひとつであったロンドンで刊行されていた音楽雑誌記事の分析を通して、イギリスでの神童の受容について検討した。19世紀を通して、イギリスで神童は全面的に褒めたたえられ、受け入れられていた。それと関連して、ピアノ演奏者の技巧的（ドリル的）な側面に対しても、積極的に評価していたことが明らかになった。

教育環境に恵まれ過ぎたことによって詰め込み教育をされる子どもと、教育環境など一切考慮されずに過酷な児童労働へと駆り出される子どもは、両極に位置しているように見える。しかし神童は、恵まれた環境下での楽曲訓練や教養や作法の特訓と、チェルニーのように一日15時間ものレッスンを教師として行ったり、労働というべき旅回りの演奏活動という二重苦を強いられていたりしたことからも、やはり特殊な存在であると改めていよう。「奏でる子ども」は、工場法で救済の対象とされてきた、いわゆる児童労働として批判的に語られる工場で搾取されていた子どもでもなく、学校へ通う中産階級家庭の子どもでもない、そこから見落とされた子どもたちである。彼らの階級や身分を特定することも非常に困難であるため、今後慎重に見極めたい。

また今後の課題として、1810年代のイギリス音楽雑誌が現時点で入手不十分のため、引き続き資料収集と考察の必要性がある。また岡田によれば、クララ・シューマンを神童ピアニストに育て上げた父親クララ・ヴィークの教育法は、ルソーやバゼドー、ペスタロッチらの教育論から習得したものだったという。つまり岡田の指摘は、神童教育は公教育が発展しつつある時代に逆行するように前近代的な形式をとるものだとされていたが、実は近代教育思想の基礎を築いた人物たちから影響を受けていた可能性があることを示唆している。このことはヴィークの実践記録や教育論から検証されねばならない。

そして、イギリス国内の教育に関する法制史や学校史との関連や、いずれは音楽学校・音楽コンクールへと神童が収束されていくと考えられる過程をより丁寧に追い、他の地域や時代との比較ができるようにしたい。

註

- 1 外界の音が遮断されたホール内で、音楽のみに集中して聴き、自己の精神を高めようとする姿勢のこと。このような禁欲的な態度は子どもにはできないとされ、ホールへの入場を制限された。
- 2 公開演奏会の誕生と聴取の変化、大人/子どもの意識の分化については、拙稿（「近代的聴衆と子ども」、『人間文化創成科学論叢』、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、第11巻、2009年、369-378頁）を参照。また、人びとが音楽を楽しむ娯楽施設は、階級によって異なっていた。今回は中産階級以上の人びとが楽しむコンサート・ホールに限定する。労働者階級が音楽を享受していたミュージック・ホールに関しては井野瀬の研究に詳しく、ミュージック・ホールでは子どもたちも大人に交じって演し物を楽しんでいたという。さらに、このような大人と子どもが入りまじって音楽を享受していた傾向が、貧しい労働者居住区に近いほど顕著であった。このことから、階級が低いほど大人や子どもを意識することには関心が低かったと推測される。
- 3 Freia Hoffmann (1945-) ドイツのオイデンブルク大学教授。2001年に音楽学における女性研究を目的としたソフィー・ドリンカー研究所を設立し、所長を務める。専門は音楽学・音楽教育学。

竹山 19世紀イギリス音楽界における子ども演奏家の実態

- 4 竹山貴子「〈小さな演奏家〉の受容形態に関する一考察 ―ホフマンの神童論に着目して」、(『人間文化創成科学論叢』、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、第12巻、2010年、249-256頁)
- 5 Paula S. Fass カルフォルニア大学パークレー校 歴史学教授
- 6 *Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society three volumes*, (Macmillan Reference, 2003) p.165
- 7 1412-1431フランスの愛国者。救国の信託を受けたと信じ、シャルル7世に上申していられ、イギリス軍を破ってオルレアンを包囲を解いた。のちにイギリス軍に捕えられ、ルーアンで異端として火刑に処せられたが、1920年にローマ教皇庁により整序に列せられた。
- 8 1756-1791 18世紀にヨーロッパの中心地で活躍し、9歳までに交響曲を作曲した。
- 9 1916年ニューヨーク生まれ、1999年ベルリン没。4歳の誕生日から数ヶ月間、サンフランシスコでヴァイオリンを学び始め、1924年にサンフランシスコで、26年にはニューヨークでデビューして大成功を収める。
- 10 1881年スペインに生まれ、1973年没。おもにフランスで活躍した画家、彫刻家、版画家。
- 11 例えば、穴吹章子(「ワーズワースの子どもと神童」第5巻を中心として)、『神戸英米論叢』第12号、1998、1-12頁)によれば、17世紀後半のロックの「白紙説」により、親は子どもへの関心を次第に強め、子どもの生存可能性への配慮だけではなく子どもの陶冶可能性や教育可能性を信じ、子どもの将来を期待するようになった。そのため、早期英才教育が盛んとなるが、同時に批判もあったという。特にワーズワースの『序曲』第5巻の詩行に、神童批判の立場が明瞭に反映されていることを指摘した。
- 12 教育学分野において、社会との関連で神童を研究したものが少ないことを、ホフマンは「一九七五年以来の「子どもの歴史」に対する学問的な関心の高まりから考えるなら、この分野でのまとまった研究が他にみられないのは、驚くべきことである。」と述べている。
- 13 Freia Hoffmann, *Instrument und Körper: die musizierende Frau in der bürgerlichen Kultur*, (Frankfurt a. M. 1991.)
坂井葉子=玉川裕子共訳『楽器と身体：市民社会における女性の音楽活動』(春秋社、2004年) 332頁
- 14 ホフマンの神童論の検討および神童の子ども観については、拙稿(2010)を参照
- 15 竹山、2010
- 16 竹山、2010
- 17 劇場だけではなく、プレジャー・ガーデンと呼ばれる野外娯楽施設でも演奏が盛んに行われていた。
- 18 Hoffmann, 1991, p.330
- 19 Leanne Langley (“The Musical Press in Nineteenth-Century London”, Notes, 1990, pp.583-592)によれば、19世紀イギリスでの音楽雑誌の種類は200を超え、そのほとんどはロンドンで刊行されたという。
- 20 Répertoire International de la Press Musicaleの略で、1800年から1950年の新聞・雑誌記事に限定して網羅的に採録。130誌を対象。
- 21 西原稔(PITNAホームページ：ピアノの19世紀 02都市のピアノ音楽風土記 ロンドン その1 2011年11月28日 http://www.piano.or.jp/report/02soc/nshr_19th/2007/11/10_7482.html)によれば、ほぼ同時期に*The Musical Bijou* (1829-1851)も刊行されていたが、こちらはカドリュークやポルカといった大衆が好む舞曲が多く掲載されていたため、大衆向けの雑誌とされたという。
- 22 1813年6月マンチェスター生まれ、1832年8月19日レミントン没。トマス・アスプルの10人の息子のうち9男。1825年のパリでの演奏はロッシェニが賞賛した。
- 23 Barry Cooper, *Child Composers and Their Works; A Historical Survey* (THE SCARECROW PRESS, INC, UK, 2009) p.132
- 24 *The Musical Times and Singing Class Circular* には1887年と1894年に3度ずつ、その後続誌*The Musical Times*では1909年、1922年、2006年に取り上げられている。
- 25 Hoffmann, 1991, p.345 テレーザ・ミラノは1843年の『一般音楽新聞』にて13歳と記載されていたが、実際は16歳近かった。ホフマンは、「神童の場合につきものの、年齢を何歳かごまかそうとする試み」と表現している。
- 26 ホフマンは、ベルリオーズが1843年にドイツへ演奏旅行をした際、同時期にミラノ姉妹が巡演していたという理由で、予定していたコンサートのいくつかを諦めねばならなかった例を挙げている。
- 27 Hoffmann, 1991, p.171
- 28 ショパンの弟子Carl Filtsch (1830-1845) のことか。
- 29 岡田暁生『ピアニストになりたい! 19世紀 もうひとつの音楽史』(春秋社、2008) 124頁
- 30 Hoffmann, 1991, p.329 「ほとんどのコンサート評において、まず最初に評者が「促進栽培のヴィルトゥオーゾ」に対する拒否の姿勢を明らかにし、「親たちの投機精神」や「音楽における児童虐待」を槍玉に挙げるのが、慣わしとなっていた。」
- 31 ホフマンによると、女性が職業を持つことが困難な時代で、神童は女性(女兒)でも活躍できる数少ない職業だったことから、なるべく子どもである期間を長くするために、わざと子ども服を着て年齢を詐称しながら活動していたという。
- 32 現National Society for the Prevention of Cruelty to Children
- 33 ホフマンによれば、1843年の『ウィーン一般音楽新聞』にはすでに神童に対して、「いわゆる子どもによる有償労働に真っ向から反対する人々」の記事が登場していた。それでも、神童の魅力には勝てず、人びとの興奮を抑えられなかったという記事の内容は興味深い。
- 34 岡田暁生、2008、117-118頁
- 35 イギリスにおける音楽教育については、公教育成立の流れとあわせて別稿で論じたい。